

美術の窓 (142)

葛飾北斎の若衆図ほか

大和文華館館長 浅野秀剛

前回、北斎の娘の応為の作品について書いたが、今回は、北斎の作品で、秋のあべのハルカス美術館での「北斎」展に出品される「若衆図」について考えてみたい。

北斎は、生涯に肉筆画の若衆図を何点か描いているが、そのなかで最も著名なのが、今回出品される、大英博物館蔵の「若衆図」(絹本着色、図1)と、氏家浮世絵コレクションの「若衆図」(絹本着色、図2)であろう。ともに81歳、天保11年(1840)の作品で、対して見るとぴったりすることから、対幅であったのではないと思われる作品である。

大英博物館蔵の美童は、陰陽の桜模様の上着とそれと揃いの羽織、間着と下着の襟も桜尽くした華麗な衣装に身を包むが、この図の若衆が、どのような身分の人であるのかを具体的に示すのはなかなか難しい。若い武士、武家の小姓などを想定しても、17~18世紀ならともかく、19世紀にこのような装いをしていたとは考えにくい。最も近いのは、まだ前髪を残すほどに若い、若衆方の歌舞伎役者(色子)である。若衆方の役者が新年の挨拶などに出る時は、振袖に袴、又は振袖に羽織袴姿で、脇差を差していたことが図像で確認できるからである。氏家コレクションの若衆はもっと難しい。こちらは振袖姿の町人の若衆である。一見地味な衣装に見えるが、氷割と梅花の小紋の



図1・図2 大英博物館「HOKUSAI」展図録から複写



図3 大阪市立美術館「北斎—風景・美人・奇想—」展図録(2012)から複写



図4 大英博物館蔵



図5 大英博物館蔵



図6 国会図書館蔵

上着は十分緻密で、織細かつ丁寧な筆致は大英博物館蔵の「若衆図」に劣らない。手前には、硯箱と巻紙と小刀が置かれ、文(恋文)を案じているように見える。背後には、本を包んだ風呂敷が描かれている。一見して、町家の小僧(丁稚)のように見えるが、陰間のような振袖姿であることが訝しい。想像をたくましくすると、奥向きに出入りする貸本屋で、時に色を売る若い男という設定も考えられるが、19世紀の作品に類似のものを見出すことが私にはできない。

北斎は、30代から40代にも若衆図を描いている。ワシントンのフリーア美術館蔵のもの(紙本淡彩)は、陰間と思われる若衆、千葉市美術館蔵の画帖に収められたもの(絹本淡彩、図3)は、武家の小姓を描いたものと思われる。それらの絵には現実みがあるが、「北斎漫画 九編」(1819年刊)の「姣童(嬌童の意)」(図4)になると、中国風俗の女性二人と一男に描かれていることもあって、19世紀の日本の風俗なのかどうか戸惑う。袴を着た振袖姿の男性は果たして何者なのだろうか。

北斎の絵本・絵手本を調べていた時、『和漢絵本魁』(天保7年-1836刊)に「鎌倉権五郎景政勇力」(図5)と題して美童図を描いているのを見出した。その図は、振袖・袴姿の若衆が、浪人(野武士)風の二人の男を投げ飛ばしている図である。鎌倉権五郎景政は、歌

舞伎の荒事「暫」のモデルともなった平安時代後期の武将であるが、『和漢絵本魁』では、投げ飛ばされた男ともども、江戸期の風俗に描かれているのである。しかも、美男の若衆である。

そうしたら、今年に入って偶然、太田彩氏の「『西瓜図』—修理報告と伝来再考」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』第22号、2017年3月)を拝読する機会を得、文政7年(1824)刊、柳亭種彦著『還魂紙料』の挿絵に、北斎が「若衆木偶(にんぎょう)」の図(図6)を描いていることを知った。若衆木偶は、元禄頃に作られたもので、そのイメージが、『和漢絵本魁』や出品作の肉筆画の若衆図と似ているのである。その瞬間、北斎の心の内が一瞬見えたような気がした。高年の北斎は、現実の若衆図に若衆木偶図のイメージを加え、北斎独自の若衆図を創造していたのではないであろうか。

北斎の作品には、他にも、どの時代の風俗なのか、どこまでリアリティーがあるのか、解説しがい作品が少なくない。

他の例を挙げるとすれば、今回出品される「源頼政鶏退治図」(絹本着色、個人蔵、図7)がある。鶏退治の折の頼政の伝統的扮装は、狩衣袴に長烏

帽子姿である。その図様は、「平家物語」の記述に端を発していると思われ、浮世絵版画や絵入版本では鎧の上に狩衣袴を着ける図様が多い。ところが、本作の姿は異様で、鎧の胴の上に着しているのは小袖様のもので、袴もよく分からない形をしている。長烏帽子はいいとして、藁草履を履くというのも異例であろう。おそらく北斎は、叢雲のなかに矢をつがえる、荒々しい勇壮な頼政を強調しようとして、手足を露出させて藁草履を履かせ、複雑かつ自在な衣紋を形作ったものと推量される。その推量が当たっているとすれば、北斎は新しい頼政像を創造したことになる。

しかし、考えてみれば、恣意的?に図像を変えるということは、程度の差はあれ、北斎に限ったことではない。鈴木春信画「鞠と男女」(中判錦絵、図8)の若衆鬻の男は、振袖であるだけでなく、優美な薄物の羽織を着ているが、それは、鞆水干(すいかん)という蹴鞠の正装を念頭に春信が創造したものではないかと思われるのである。



図7 大英博物館「HOKUSAI」展図録から複写



図8 千葉市美術館所蔵浮世絵作品選(2001)から複写